

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいさんしゅう
しゅくめいてんかん
第三章 宿命転換

へんどくいやく
変毒為薬

りゆうじゅぼさつ

だいろん

い

たと

だいやくし

よ

どく

竜樹菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の能く毒をも

くすり

うんぬん

もん

だいろん

ほけきよう

つて薬となすがごとし」云々。この文は、大論に法華経

みよう

とく

しゃく

もん

みようらくだいし

しゃく

い

の妙の徳を釈する文なり。妙楽大師、釈して云わく

じ がた よ じ

みよう

しょう

とううんぬん

「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。

ほけきようだいもくしょう

みよう

さんぎ

こと

033 法華経題目抄（妙の三義の事）

へんどくいやく

変毒為薬 537ページー17行

りゆうじゅぼさつ

だいろん

みようほう

みよう

いちじ

竜樹菩薩は「大論」のなかで、妙法の“妙”の一字について

めいい

どく

くすり

かいしゃく

「たとえば名医が毒をも薬とするようなものである」と解釈して

どく

なに

わたし

ぼんのう

いますが、ここでいう“毒”とは何かといえ、私たちの煩惱・

ごう く さんどう

業・苦の三道のことであり、“薬”とはそれら三道を転じた法

しん はんによ げだつ さんどく

身・般若・解脱の三徳のことです。

さんどう てん ほつ

りゆうじゅぼさつ

みようほう

みよう

いちじ

しゃく

たと

竜樹菩薩、妙法の妙の一字を釈して、「譬えば、

だいやくし

よ

どく

くすり

とううんぬん

大薬師の能く毒をもつて薬となすがごとし」等云々。

どく

なにもん

われ

ぼんのう

ごう

く

さんどう

「毒」というは何物ぞ、我らが煩惱・業・苦の三道なり。

くすり

なにもん

ほっしん

はんや

げだつ

「薬」とは何物ぞ、法身・般若・解脱なり。

しもんぶつじようぎ

(138 始聞仏乗義

へんどくいやく

変毒為薬

1327

ページー9行)

ひと ち たお
人の地に倒れて、還かえつて地ちより起おくるがごとし。

おおたにゆうどうどのごへんじ

151 太田入道殿御返事

へんどくいやく

変毒為薬 1360 ページ 15 行

みようらくだいし ほつけもんぐき

ひと だいち たお

（妙楽大師の法華文句記に）「たとえば人が大地に倒れたなら

た あ

だいち て

た あ

ば、立ち上がるときにはかならずその大地に手をついて立ち上がるよ
うなものである」とあります。

りゆうじゅぼさつ だいろん ほけきよう いちだい 勝 様

竜樹菩薩の大論に法華經の一代にすぐれていみじきよう

しゃく い たと だいやくし よ どく へん くすり

を釈して云わく「譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬と

とうろんぬん

なすがごとし」等云々。

214 しじょうきんごどのごへんじ しりょうかぞう こと
（四条金吾殿御返事（所領加増の事））

へんどくいやく

変毒為薬 1606 ページ 6 行

みろくぼさつ ゆがろん りゆうじゆぼさつ だいろん みそうら じようごう

弥勒菩薩の瑜伽論、竜樹菩薩の大論を見候えば、定業

もの くすりへん どく ほけきよう どくへん くすり

の者は薬変じて毒となる、法華経は毒変じて薬となると

み そうろう

見えて候。

215 しじようきんごどのごへんじ せつこししょうぐんごしよ
四条金吾殿御返事（石虎將軍御書）

へんどくいやく

変毒為薬 1607 ページ 15 行

みようほうれんげきよう

とく

粗

々

もう

ひら

どくやくへん

くすり

妙法蓮華經の徳、あらあら申し開くべし。毒藥變じて藥

みようほうれんげきよう

ごじ

あくへん

ぜん

ぎよくせん

となる。妙法蓮華經の五字は、惡變じて善となる。玉泉

もう

いずみ

いし

たま

ごじ

ぼんぷ

ほとけ

と申す泉は石を玉となす。この五字は凡夫を仏となす。

うつぶさのにようほうごへんじ

（389 内房女房御返事

へんどくいやく

變毒為藥

2033

ページー13行

しらかみ すみ そ 白紙を墨に染むれば黒くなり、黒漆に白物を入るれば白
くろくろうるし しろいもの い くなるがごとし。毒薬変じて薬となり、衆生変じて仏
どくやくへん くすり しゅじょうへん ほとけ
ゆえ みようほう もう となる。故に妙法と申す。

399 新池殿御消息

にいけどのごしようにそく

へんどくいやく 変毒為薬
2059 ページ 10 行